帝国と暗殺

ジェンダーからみる近代日本のメディア編成

明治期メディア批評の一達成

野心的文体と緻密な調査が結びついて

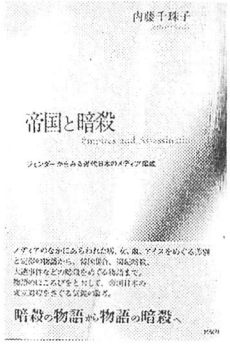
佐藤　泉

物語を批判しながら物語の可能性を読み取るために「いま、物語を暗殺しなければならない」という語り出しは物騒だが、本書は決して乱暴な本ではない。すぐれて緻密な明治期メディア分析を行っている。明治期の新聞・雑誌は、病原菌を語り、病と血と滅亡を語り、皇后、売春婦、女学生を語ってやまなかった。その言葉に浸透し、性懲りもなく反復され紋切り型と化した「物語」が抽出される。一連の物語を集約していた「女という記号」を中心に、「日本語メディア共同体のわれわれ」は、好奇心と欲望をたえまなくそそりたてられ、怠惰な感性を育て上げ、そしていつしか他者を描き出し、それを鏡に今度は自分の輪郭を描き始める。ことによったら著者は明治末期の新聞という新聞に目を通したのではないだろうか。感嘆すべき資料踏査によると、紙面には女をめぐるトンデモ記事が散乱している。もっともそれは明治に限ったことでなく、著者の言及する東電ＯＬも、日本人に暗殺された閔妃も、逆徒・菅野須賀子も、物語の水準においては一様にスキャンダラスな悪女である。この鬱陶しさに対しては「公正な報道」を要求するか、早急にウンザリするかといった対応がありうるが、著者の構えはどちらでもない。物語の執拗さに付き合った末に、おのずからそこに穿たれたほころびに注視する。物語の機能不全、すなわち物語の可能性なのである。

本書の構成は考え抜かれたものである。第一部では伝染病と血、女、アイヌを語る言葉に分析を加えたうえで定形イメージを抽出する。当時のプリントメディアは、まさにひとたびその通俗性を指摘されたなら誰も恥ずかしくて二度と口にできないような紋切り型の氾濫する空間だが、しかし実状として定形物語は厭きるまで反復されていたらしい。そしてその型は、第二部の主題である「暗殺」においても執拗に反復され、ついにあたかも物語じたいが殺意を抱いているかの様相を呈するのである。暗殺された閔妃は「メディア共同体のわれわれ」にとってグロテスクなまでに嫉妬深く残忍な悪女であり、一方、天皇暗殺を企てたかどで死刑となった菅野須賀子もまた性的に放縦な女、スキャンダラスな物語の女主人公なのである。

野心的文体と緻密な調査・分析とが結びついた明治期メディア批評の一達成として、なにより本書の刊行を祝いたい。以下は、高水準の達成であることを前提とした望蜀である。望蜀というより想像されたものの分析を重視する研究の立場にとっては単に「反動的」な感想だが、実は、細密なジェンダーイメージ分析をたどるうち、そのイメージの厚みの向こうにいたはずの彼女ら・彼らが、日本のメディアならぬそれぞれの場で、歴史のアクターとして何ごとかを企て、何ごとかを行おうとしていたにちがいない、むしろその場へと関心が向かってしまった。日本のメディアは金玉均暗殺を日本人暗殺のごとく表象したという。が、日本の描いた金玉均はともかく朝鮮近代史の金玉均評価は単純ではない。「親日派」のはしりとも、自分の国を近代化と独立へ導こうとした先覚者ともいえる彼の位置は植民地近代の矛盾に満ちている。日本のメディアが自らの関心にしたがって単純化したのがその複雑なテーマだったとすると、「日本人」金玉均の殺害に関わったとされる親清・親露的な閔氏の女が悪女として描かれた地点にも、複雑な矛盾と緊張がせめぎ合っている。歴史の矛盾と緊張の内にあって、人はジェンダーのみにて悪女となるわけではない。要するに閔妃イメージを分析した箇所で、私はつい親日・反日を日本の言説がどう語るかという点に関心を引かれてしまったが、もちろんそれは著者の提出した資料に導かれ、あざやかなジェンダー分析に感嘆しつつのことである。（さとう・いずみ氏＝青山学院大学助教授・日本近現代文学専攻）

★ないとう・ちずこ氏は早稲田大学・日本大学ほか非常勤講師・近代日本語文学・文芸批評専攻。東大大学院博士号取得。共著に「文化のなかのテクスト」など。一九七三（昭和48）年生。



46判・413頁・3990円
新曜社
4-7885-0968-7

2006年1月13日　週刊読書人